

明治期における吉田家の下総開墾地経営

小 山 幸 伸

1. はじめに

本稿は、現在の千葉県柏市豊四季地域において、明治初年に開墾事業に参画し、その後、小作地経営を行った吉田家について、現存する史料を調査したことから判明した事実を紹介するものである。同地域は、明治維新政府の事業として下総台地において開墾事業が展開された13の地域の1つである。この開墾事業についてはよく知られているが¹⁾、開墾会社解散後については、小作地をめぐる訴訟について知られるばかりで、その後の開墾地の展開に関する研究成果は多くはない。現存する史料を調査し、その実態を解明することで、開墾会社による事業終了後に元開墾会社社員が地主として農業経営を継続し、地域発展の礎となった側面も考察する必要がある所以である。

明治2年(1869)に開始された下総台地の開墾事業は、千葉県下の多くの自治体史でも紹介されており、明治維新政府による東京の窮民に対する救済・授産事業としての性格を持つものであったことはよく知られている。下総台地には江戸時代に幕府の馬牧である小金牧・佐倉牧が広がっていた。これらの牧の開墾自体は、幕末期の慶応2年(1866)に幕府により荒蕪地に対する開墾奨励の命令が出されたことを契機として開墾願いが出されていたが²⁾、本格化するのは明治維新政府が東京の富商たちに要請し、三井八郎右衛門が総頭取となり開墾会社が成立してからのことである。表1に示したように、東京の富商が開墾会社社員として開墾地を担当し、それぞれの開墾地には美名が付されたのであった。これらの開墾地には多くの東京窮民が入植したが、開墾事業は失敗に終わり、開墾会社も明治5年(1872)

表1 開墾場所別会社の社員名

開墾地名	旧牧の名称	現市町村名	会社社員名
初富	小金牧内・中野牧	鎌ヶ谷市	大村五左衛門・加太八兵衛・湯浅七左衛門
二和	〃 ・ 下野牧	船橋市	星野清左衛門
三咲	〃 ・ 下野牧	〃	西村郡司（実際の担当は代人の原寛介）
豊四季	〃 ・ 上野牧	柏市	三井八郎右衛門・中村庄兵衛・吉田善四郎・下山太兵衛
五香・六実	〃 ・ 中野牧	松戸市	小栗吉右衛門・増田喜十郎・田中左次兵衛
七栄	佐倉牧内・内野牧	富里市	嶋田八郎左衛門・吉村甚兵衛・林留右衛門・上野四郎兵衛・瀬部太郎右衛門
八街一番	〃 ・ 柳沢牧	八街市	野口庄三郎・元木清兵衛・善野佐八郎・西村郡司（村井弥兵衛跡）
八街二番	〃 ・ 〃	〃	饗庭八兵衛・伊東喜助・大久保源兵衛・村田吉右衛門・谷口庄蔵
八街三番	〃 ・ 〃	〃	西村郡司
八街四番	〃 ・ 〃	〃	坂江吉右衛門・森岡兵右衛門・大鐘永蔵
八街五番	〃 ・ 〃	〃	山口武兵衛・松田喜右衛門・松本喜三郎・神田太助・脇坂助右衛門
八街六番	〃 ・ 〃	〃	西村郡司
九美上	〃 ・ 油田牧	香取市	黒野太兵衛・中沢彦吉
十倉	〃 ・ 高野牧	富里市	榎本六兵衛
十余一	小金牧内・印西牧	白井市	西村郡司
十余二	〃 ・ 高田台牧	柏市	三井八郎右衛門
十余三一番	佐倉牧内・矢作牧	成田市	中沢彦吉
十余三二番	〃 ・ 〃	〃	小野善助（半田久蔵跡）
十余三三番	〃 ・ 〃	〃	小野善助

（出典）『柏市史 近代編』（2000年）190頁、表46。現在の市町村名に修正した。

に解散し、その後は、三井組を中心に明治11年（1878）まで残務整理を行っていた。

本稿で取り上げる吉田善四郎は、開墾会社の頭取として豊四季村を担当している。豊四季村では、三井組が積極的に近在より移住小作人または通いの小作人である出小作人を受け入れたことが知られている³⁾。開墾会社による開墾事業の当初目的には、東京窮民への授産というねらいもあったのだが、農業に不慣れな「窮民」を支えるためには「富民」だけでなく、自費開墾の「力民」の協力が必要であった。そのような三民の協力体制は、結局構築することは出来ず、むしろ近在の窮民が開墾会社の小作人になる

約束で開墾地に入植してきていたのである。彼らは東京窮民と同様の窮民であったが、個別に開墾会社と小作契約を結んでいたために、東京窮民と同じ待遇は受けられなかった⁴⁾。東京窮民の場合、入植条件として13歳以上60歳以下の者には1人につき5反歩、1戸につき家作地5畝歩を渡す約定であった。農業に就く者には1日に付き白米5合が貸し与えられ、10年間で返済を行う。返済できない場合は小作人になる約定となっていた⁵⁾。このように開墾人は1戸あたり5反5畝の土地を得たが、その他に開墾した土地については会社社員の小作地となり、開墾人が耕作を続ける場合、小作料を支払わなければならなかった。この点を理不尽に感じた開墾人は社員の土地独占の非を訴え始めた。それ以上に不満を感じていたのが近年から入植し小作人となった開墾人である。彼らの場合は、5反5畝の渡し地すら得られなかったのである。このような土地の帰属をめぐり、開墾地の農民は法廷闘争を行った。とりわけ豊四季村では小作人が多く、それ故に法廷闘争も激しいものとなったのであった。裁判では、当初は地券の交付をめぐり争われたが、それが認められないと地券の書き換えを要求する闘争を展開した。会社解散後、豊四季村の小作人は小作料不払いを行ったが、それに対して旧会社側は小作地の引き上げを図ったのである。裁判自体は、小作証書を取り交わしていたことから、三井組が勝訴し、三井組の代人である市岡晋一郎は小作料やその利子を厳しく取り立てた⁶⁾。

吉田家は、このようにして成立した小作地を所有する地主として、豊四季村で小作地経営や金融などを営んでいた。同家の古文書は、現在、千葉県文書館に「沼南町高柳 吉田家文書」として所蔵されている⁷⁾。同館所蔵の古文書から、下総台地の開墾地において、開墾会社解散後の主として明治10年代における、同地域で行われた小作地経営や同村における金融活動などの一端を紹介したい。それにより同家が地主としてどのように経営を行ったのか、また同地域がどのような過程をたどるのかを考察する一助となるだろう。というのも、開墾会社社員は1反歩を1円とみなした立替

金に応じて土地が給与され地主となったのであるが⁸⁾、その旧社員や近在の地主たちが入手した土地のなかには、適当な小作人が存在せず再び荒れ地に戻る事例もあった。そのような土地のなかには、開墾人や近在農家の二男・三男が分家する際にその荒蕪地を借り小作人として再開墾される土地もあった⁹⁾。吉田家のみならず、現地に移住した八街の西村郡司のように開墾会社解散後も現地に定住した地主の農業経営の実態を探ることで、地域の発展過程を解明することに繋がると考えられるのである。かかる視点から吉田家の経営を考察することが本稿の目的である。

2. 吉田家と総理代人斉藤徳次郎について

本稿で取り上げる吉田家は、豊四季村の開墾を担当した。当主吉田善四郎は、東京橘町で河内屋と称して両替商・酒商を営んでいた。豊四季村へは明治2年(1869)11月に、善四郎の代人として息子の芳太郎と総理代人の斉藤徳次郎が移住したが、明治7年(1874)に芳太郎が亡くなり、その後は善四郎の甥にあたる耕太郎が跡を継いでいる。善四郎も明治17年(1884)には亡くなり、婿養子の源次郎が跡を継いでいる¹⁰⁾。

また総理代人として共に移住した斉藤徳次郎は、明治15年(1882)3月18日には、吉田善四郎に対して、「私義、吉田耕太郎総理代中同人ト係ル諸借財并ニ財産抵当ニ其他不都合之義一切無之、且小作上り物等自俣ニ仕間敷候、若シ不都合次第有之候ハ、代人相解キ貴殿江聊御迷惑相掛け申間敷候」¹¹⁾と記した「入置申証」を提出している。斉藤徳次郎は吉田家の総理代人として吉田家との間における借財や財産抵当において不都合がないことや、小作料に関して恣意的なことを行わないことを約し、不都合なことがあれば解職してもらい少しも迷惑を掛けることのないようにする旨を記載している。明治2年(1869)から総理代人を担っている斉藤徳次郎が、このような誓約書と見られるものを明治15年(1882)3月18日付で提出した背景は不明であるが、同日付けの「礼状一札」¹²⁾と題する史料には、「総

理代勤中年給其他」として金600円と屋敷地1反歩を頂戴したことに対する感謝を吉田善四郎に対して記した文書を提出している。明治15年(1882)に改めて総理代人として勤務することを誓い、それに対する年給の給付が確認されたということであろうか。翌明治16年(1883)10月24日には、斉藤徳次郎は「前書之建家之義ハ、先般都合ニ依リ私名義致シ候得共、実ハ貴殿之家作ニ相違無之(中略)家賃トシテ壹ヶ月金五拾銭宛毎月相納可申候、且貴殿方ニテ御入用之節ハ何時成共御差図次第急度明渡シ可申候」¹³⁾と記し、吉田善四郎から家屋を借り受ける「家作借受証」を作成している。すなわち、家屋を斉藤徳次郎名義としているが、実態は吉田善四郎の家作であり、毎月50銭の家賃を納め、吉田家が必要のある際にはいつでも明け渡す約定を記している。さらにその翌年である明治17年(1884)2月28日には、斉藤徳次郎の私的な負債である金300円を吉田善四郎から出金してもらったことと、その他に吉田耕太郎の総理として金銭・物品の借財が無い旨を記した「約定書」¹⁴⁾を提出している。さらに明治20年(1887)1月22日には、斉藤徳次郎は「今般自分儀追々及老年身体不自由ニ相成」ったので、生存中は1ヶ月米1斗5升を老人扶持として下げ渡されることになり、それ以外は無心などしないことを吉田源四郎に確約している¹⁵⁾。このように現存する史料からは明治15年(1882)から明治20年(1887)までの間に、豊四季村の経営にあたり斉藤徳次郎を厚遇している様子が確認できるのである。

明治15年(1882)以降に斉藤を厚遇したのはなぜであろうか。史料の残存状況による偶然の問題もあると思われるが、このことについて興味深い事実を示すと思われる史料を、吉田善四郎が記している。ただ、残念ながら、この史料は後半が欠損しているため、全体像が十分には分からない。そこで判明する範囲から、おおよその事情を推測してみたい。

(史料1)

(前略) 前書耕太郎義、幼年殊ニ親類共遠隔住居ニ付、同村六十七番地

農齊藤徳次郎エ、家事向懸之義依願致置候処、徳次郎義追々増長自俣ニ惣理代人ト相喝候趣も有之、然ル処耕太郎義最早本年十六年ニ相成、自分親類共も同村エ移住罷在旁懸之依頼ヲ解、惣理代之名義取消候様申俣候得共、彼是我意申募リ私共申分更ニ取敬不申候間、自全耕太郎惣理代人之名義ヲ以齊藤徳次郎義後日何様可申出哉も難有、万一同人義耕太郎ノ惣理代人之名義ヲ以何様出願候共、決而御採用不（後欠）

（千葉県文書館所蔵吉田家文書・ア54）

この史料にあるように、耕太郎が幼少であり、吉田家の親類も遠隔地に住んでいたために、豊四季村67番地の農民である齊藤徳次郎に惣理代として家事向きの運営を依頼していたところ、徳次郎が増長して来た。耕太郎も16歳となり、自身も親類も同村に移住することにしたので、徳次郎の総理代人の名義を取り消そうとしている状況が見られる。耕太郎が芳太郎に代わって開墾地経営に携わったのは、前述したように明治7年（1874）であるから、この史料1は明治7年（1874）以降に作成されたものである。またこの史料の作成者が「吉田耕太郎叔父吉田善四郎」とあることから、善四郎が亡くなる明治17年（1884）までに作成されたものである。まだ若年であった耕太郎に対して、齊藤徳次郎は農民として農業経営に長けていた上に、明治2年（1869）に豊四季村に移住しており開墾事業の当初から関与していた。齊藤徳次郎の増長というのも十分に理解できる状況であった。これに対して吉田家の当主である善四郎が厳しい対応を迫ったか、あるいは迫ろうとした下書きが史料1ではないだろうか。これは前述したように明治7年（1874）から明治17年（1884）の間に作成されたものであるが、先の明治15年（1882）3月18日に齊藤徳次郎が「入置申証」を提出する以前に作成されたものである可能性が高いと考えられる。齊藤徳次郎が改めて誓約書を提出することで、両者の関係が再構築されたということも想定できるのである。

開墾事業を展開していく上で、出資者である富商は当然必要であるが、

農業経験を持ち現地を監督する存在は必須であった。豊四季村において農業経営を実質的に担った斉藤徳次郎は、吉田家の農業経営において手放せない存在であったのであろう。そのことが、明治15年の誓約書たる「入置申証」提出後、改めて斉藤を総理代人として重用することに繋がったのだと推定できる。

3. 吉田家の土地売買

明治5年（1872）に開墾会社は解散したのであるが、その解散にあたり豊四季村の土地は会社社員に分配されている。その内訳を示したものが表2である。最も多くの土地の分配を受けたのが吉田善四郎であり、三井組の1,462反（146.2町）余りを超えて、1,890反（189町）余りの土地を所有することになっている。これらの土地の多くは小作地として経営していくことになるのである。ちなみに、明治12年（1879）の調査によると、三井組の所有地では、移住小作人25人に畑14町歩余りを貸付け、出小作人111人に24町歩余りを貸し付けている¹⁶⁾。このように多くの小作人を利用した小作地経営を展開していたことで、前述したように小作人との間に、土地を

表2 豊四季の土地分配

単位：反

分 配 先	面 積
三井組持	1,462.606
中村持	1,200.611
吉田持	1,890.214
下山持	430.717
道敷	182.303
農舎（105戸）	643.325
鎮守社	2.000
墓所	5.000
斃馬捨場	1.000
合計	5,817.916

（出典）『柏市史 近代編』（2000年）255頁、表52。

（注）合計数は原史料に記載されている数値のママとする。

巡る激しい法廷闘争が展開したのである。そのような動向に対して、三井組では三野村利左衛門の指示により、小作人との訴訟を回避するために、明治政府の有力者に土地を譲渡している¹⁷⁾。

同じような対応を吉田家でも実施している。そのことを示す史料が次の史料2である。

(史料2)

地所売渡約定之証

千葉県下第十二大区七小区下総国葛飾郡豊四季村地内字向中原第六百七拾壺番ヨリ字中原八百六拾番迄地券証券計七拾三枚

一地券証面反別合計六拾八町八反九畝廿六歩

此地券証面代価合計金九百九拾八円〇五銭

前書之地所代価金五千貳百円ニ相定今般貴殿江売渡可申契約致候処確実也、尤右地所明治九年五月五日三井組へ抵当ニ相渡、金円借用有之ニ付、右金返済及貴殿へ売渡之確証并地券証名前書替願書認メ中ニ付、成規之通相認メ次第右証ト前書売渡代金五千貳百円ト引替候、是亦契約致候処確実也、然ル上ハ右地所ニ関シ決而異存無之、若万一他ヨリ故障等申出候哉又者本人異変等有之節者証人引請急度前条約定之通配分致貴殿へ決而御迷惑相掛ケ申間敷候、為後日地所売渡約定ノ証為取替置処依而如件

明治十一年六月十六日

右豊四季村

地主

売渡人 吉田耕太郎㊞

同人後見兼

証人 齊藤徳次郎㊞

東京府下本所中ノ郷村四十四番地

証人 吉田善四郎㊞

青木周蔵殿

(千葉県文書館所蔵吉田家文書・ア45)

この史料に見られるように、明治11年（1878）6月16日に地券73通分・地券証の額面での代価998円5銭の地所である豊四季村の68町8反9畝26歩の地所を、5,200円に想定して吉田耕太郎が青木周蔵に売り渡していることが分かる。この地所は明治9年（1876）に三井組に借金の抵当としていたものであったが、抵当権を外して明治政府の要人である青木周蔵に売り渡すことを確約している。これは前述した三井組が小作人との訴訟を回避するために、明治政府の有力者に土地を譲渡しようとした動向の一環として市岡晋一郎が関与したものであろう。この取引にあたり市岡に対して提出した契約証が次の史料である。ここから、この取引の詳細が判明する。

（史料3）

契約証

一明治九年五月五日拙者所有地、第十二大区七小区葛飾郡豊四季村字向中原地券証三拾七通、字中原地券証三拾六通、合七拾三通、此反別六拾八町八反九畝廿六歩、貴殿江抵当ニ相渡印紙借用証相添、金八百三拾円借用致候、然ルニ今般青木周蔵殿へ右抵当ノ全地売渡可申示談行届候ニ付テハ、右券証扱所へ持参致候までハ成規之通売渡ノ証落成不相成ニ付、右抵当ニ相渡置候証券七拾三通正ニ借用候処確實也、因テ借用金元利返済方契約左之通

一金八百三拾円也

但 明治九年五月五日吉田耕太郎負債元金、尤右利子金ハ借用証文ニ記載之通り年壹割貳分ノ約定ニ付返済之月ニ至リ計算金額ヲ定ル事

一金貳百五拾円也

但 明治十一年一月七日吉田耕太郎前同断之事、尤此負債金ニ対し抵当ニ渡置候地券証、字向神山廿四通、字向原八通、字神山六通、字中原壹通、合三拾九通ハ元利金引替之送戻被成約

一右合

元金千八拾円也

外ニ利子金ハ返済ノ月ニ至リ別紙借用証文之通、年壹割貳分ノ
利子計算金額ヲ定ル約

一前書元利金右吉田耕太郎所有地買請人青木周蔵殿ヨリ借主市岡晋一
郎へ地代金ノ内ヲ以、直ニ御渡被下候約

一前書元利金吉田耕太郎ヨリ買受候地代金ノ内ヲ以、右同人負債金債
主市岡晋一郎江直ニ相渡、残金ハ吉田耕太郎へ青木周蔵ヨリ直ニ相
渡シ可申約

一扱所其他ニ於テ、若万一右地所売渡ニ関シ故障等出来売渡ノ証落成
延引相成哉、又返金方延引相成候節ハ、本月十五日ヲ期トシ右借用
ノ地券証七拾三通、速ニ御返却確書等ハ御差図之通相認相渡可申約
(中略)

第十二大区七小区 葛飾郡豊四季村

負債主兼券証借用人 吉田耕太郎㊞

総理代人兼保証人 齊藤徳治郎㊞

東京府下拾壹大区貳小区 本所中ノ郷村四拾四番地

保証人 吉田善四郎㊞

同府下第三大区三小区 上二番町拾四番地寄留

山口県士族 買請人 青木周蔵

代理 宮本昌栄㊞

市岡晋一郎殿

(千葉県文書館所蔵吉田家文書・ア62)

この史料から、明治9年(1876)5月5日に吉田耕太郎は、三井代人市岡
晋一郎から地券73通分の地所68町8反9畝26歩を抵当に830円を借用した
ことが分かる。さらに明治11年(1878)1月7日には39通分の地所を抵当
として250円の借金をしている。その返済契約として、合計1,080円を年1

割2分の利子計算で返済する約定であった。以上の元金と利子については、青木周蔵から売却代金を市岡晋一郎に直接支払い、残金は吉田耕太郎が受け取るものとしたのである。

このように抵当としていた小作地を売却する取引は頻繁に行われていたようである。そのことを示す吉田家の土地取引をめぐる史料群のなかに、「地所売却金計算」¹⁸⁾と題する興味深いものが残されている。あくまで計算書として記録されたものであるので、取引の全体像については不明であるが、「昨廿五年九月中より入費其他不足」の記載もあり、明治26年（1893）ごろに作成されたものであることが判明する。

表3 地所売却金計算

単位：円	
A売却代	3,800.000
① 吉場へ利子共	1,178.000
② 内田由太郎利子共	156.625
③ 巢鴨寺持分	50.000
④ 高橋へ	15.000
B支払金計（①～④）	1,399.625
C差引（A-B）	2,400.375
⑤有金	679.000
⑥抵当証書	1,000.000
⑦有金	150.000
⑧見世へ借金	300.000
D計（⑤～⑧）	2,129.000
E総計（C-D）	271.375

（出典）千葉県文書館所蔵吉田家文書・ア74

その計算書の内容を示すと表3のようになる。地所の売却代金が3,800円であり、そこから①から④の「支払」をまず差引している。ところで吉田家文書に残る開墾地での金融関係史料を一覧にしたものが表4であるが、表3の①の「吉場へ利子共」と記されている吉場とは、表4の7に示した流山町の住人吉場利右衛門のことであると思われる。吉場利右衛門からは、明治26年（1893）1月9日に金200円を年1割5分で借用している。表3

の①で地所の売却代金より吉場へ元利合わせて1,178円を支払った他にも、両者の金融関係が存在していたのである。このような金銭貸借における利子などの費用の支払い①～④の合計Bを売却代金Aから差し引いた残金がCである。さらにそこから⑤～⑧を合計したDを差し引いている。この計算が示すものの実態は不明であるが、「有金」とは「前受金」として渡されているものの可能性があるのではないだろうか。借金も含め、売却相手から事前に渡されていた金額合計Dを控除して、最終的に手許に残った利益金がEの271円37銭5厘であったことを示していると推測する。

表4 吉田家の開墾地関係の金融取引

	年月日	差出人	宛先	金額	請求番号
1	明治9年(1876) 7月22日	柴田隼太郎	吉田善四郎	3円	ア38
2	明治11年(1878) 10月4日	齊藤徳次郎	鈴木直次郎	5円	ア77
3	明治12年(1879) 2月7日	吉田耕太郎	鈴木直次郎	15円	ア53
4	明治14年(1881) 1月15日	中田安右衛門	吉田	8円	ア68
5	明治14年(1881) 2月25日	板倉文吉	吉田耕太郎	*	ア75
6	明治16年(1883) 1月20日	仲田源次郎	吉田	13円	ア16
7	明治26年(1893) 1月9日	吉田源次郎	吉場利右衛門	200円	ア5
8	明治26年(1893) 1月11日	吉田源次郎	高橋正吉	80円	ア10
9	—	小野組貸付掛	吉田善四郎	450円	ア107

(出典) 千葉県文書館所蔵吉田家文書

(注) 5は金額の記載なし

以上のように、豊四季村において小作地経営を展開した吉田家は、その小作地を抵当として融資を受けることや、その土地を売却することで負債を処理することも行っていたのである。

4. 吉田家の小作地経営

前述したように、豊四季村では三井組は大勢の小作人を利用し小作地の経営を行っていた。このような小作料収入は、最も確実な収入源と意識されていたと思われる。同様の展開は吉田家においても行われていた。いま、千葉県文書館に所蔵されている吉田家文書には、明治16年頃の吉田家の小

作地経営の一端を示す史料が残存している。次の表5と表6は、吉田家文書に残る小作証書と居住地借証をまとめたものである。

表5に示したように、明治16年（1883）の小作証書としては8通残存する。これらの文書には、地所の面積と、小作料の割合として、宅地付きの小作地については1反当たり1円50銭、それ以外については1反当たり80銭とする1反当たりの年間小作料率が記され、毎年7月と12月の年2回小作料を支払う約定が記述されている。1反当たりの小作料率が記載されているだけで、年間小作料の実額の記載はない。そこでおよその数値を表5に示した。ここから明治16年（1883）には、合計2町2反7畝17歩を借地人に貸付け、合計年間20円13銭8厘ほどの小作料を得ていた様子が確認できる。

いっぽう居住地の借地証文を示すと表6のようになる。表6のうち1から10に示した明治16年（1883）の契約に限れば、年間地代として9円31銭

表5 小作証書

	年月日	借地人	地所	A) 反換算	B) 1反歩当り 年間小作料	C) 年間小作料 (A×B)	請求 番号
1	明治16年(1883) 1月4日	伊野留吉	5畝13歩	0.54279	1円50銭 (宅地付きの分)	81銭4厘185	ア101
2	明治16年(1883) 1月4日	植竹吉蔵	1町6反4畝04歩	16.39692	80銭	13円11銭7厘536	ア18
3	明治16年(1883) 1月4日	梶川忠吉	1反3畝18歩	1.35864	1円50銭 (宅地付きの分)	2円03銭7厘96	ア21
			1反2畝10歩	1.23210	80銭 (蔵地付きの分)	98銭5厘68	
4	明治16年(1883) 1月4日	田中亀吉	1反6歩	1.01898	80銭	81銭5厘184	ア25
5	明治16年(1883) 1月4日	鈴木直吉	3畝15歩	0.34965	1円50銭 (宅地付きの分)	52銭4厘475	ア92
6	明治16年(1883) 1月4日	根本留八	6畝23歩	0.67599	80銭 (飛地)	54銭0厘792	ア93
7	明治16年(1883) 1月4日	岩崎安左衛門	5畝13歩	0.54279	1円50銭 (宅地付きの分)	81銭4厘185	ア95
8	明治16年(1883) 1月4日	仲田安右衛門	6畝05歩	0.61605	80銭	49銭2厘84	ア15
			2町2反7畝17歩			20円13銭8厘*	

(出典) 千葉県文書館所蔵吉田家文書。小作証書の宛先は全て吉田善四郎であった。

(注) A) は1歩=0.00333反で計算。C) の合計は、厘未満を切り捨てて集計。

8厘の収入を得ていたことになる。先の小作料20円13銭8厘と合わせると年間29円45銭6厘となり30円弱の収入は確認できる。しかし史料の残存状況が不明という問題もあり、これが吉田家の借地経営の収入規模を示すかは不明である。

表6 居住地借証

	年月日	借地人	宛先	地所	年間地代	請求番号
1	明治16年（1883）1月 1日	秋山岩吉	吉田善四郎	24歩8合	24銭8厘	ア96
2	明治16年（1883）1月 4日	飯沼仲右衛門	吉田善四郎	28歩	28銭	ア100
3	明治16年（1883）1月 4日	植竹吉蔵	吉田善四郎	1畝 5歩	35銭	ア17
4	明治16年（1883）1月 4日	梶川忠吉	吉田善四郎	3畝26歩	1円16銭	ア20
5	明治16年（1883）1月 4日	岩佐徳次郎	吉田善四郎	2畝29歩	89銭	ア58
6	明治16年（1883）1月	仲田安右衛門	吉田善四郎	5畝24歩	1円74銭	ア14
7	明治16年（1883）7月 4日	田中亀吉	吉田善四郎	3畝17歩	1円07銭	ア23
8	明治16年（1883）7月29日	根本留治郎	吉田善四郎	3畝13歩	1円03銭	ア90
9	明治16年（1883）7月30日	三好清次郎	吉田善四郎	1畝25歩	55銭	ア24
10	明治16年（1883）8月 1日	増田藤吉	吉田善四郎	6畝20歩	2円	ア22
11	明治18年（1885）1月 2日	国松佐吉	吉田源次郎	1畝26歩	56銭	ア72
12	不詳	不詳	不詳	3畝24歩	1円14銭	ア91

（出典）千葉県文書館所蔵吉田家文書

当然のことではあるが、この居住地借証と小作証書との双方において、同一の賃借人と吉田善四郎との契約関係を示すものがある。そのうち表5の3と表6の4に示した梶川忠吉と吉田善四郎との契約を以下に提示する。（史料4）

小作証書

宅地付之分

一畑 壹反三畝拾八歩

蔵地之分

一同 壹反貳畝拾歩

右之御地所小作仕候処確實也、然ル上者壹ヶ年壹反歩二付、宅地付金壹円五拾銭・蔵地金八拾銭、割ヲ以テ豊凶ニ不抱、七月・十二月廿日

限り兩度ニ急度相納可申候、且其際本人納金差問候節者証人引請、聊不都合無之様悉皆弁納可仕候得共、該地所作荒シ又者不正ヲ釀候哉、或者貴殿御入用之節者御差図次第速ニ返地可仕候、仍而為後日小作證如件

明治十六年一月四日

東葛飾郡豊四季村

小作人 梶川忠吉^印

正人 成嶋徳治郎^印

同村 吉田善四郎殿

(千葉県文書館所蔵吉田家文書・ア21)

ここに見られるように、豊四季村の梶川忠吉は、同村の地主吉田善四郎より小作地を借り受けている。その契約内容は、宅地付分の畑1反3畝18歩と蔵地分の畑1反2畝10歩を、それぞれ1反に付き年1円50銭と80銭の割合とし、それを7月と12月の2度に分けて支払うというものであった。年間の小作料はあくまで概算であるが、それぞれ2円3銭7厘と98銭5厘であるから、合わせて3円2銭2厘ほどの小作料を支払う契約であったことが分かる。

これに対して居住地借証の方では、次のような契約内容であった。

(史料5)

居住地借之証

一 三畝廿六歩

右前書ノ通借地仕候処確實也、然ル上者地代金壹ヶ年分金壹円拾六銭年々十二月廿日限り無相違可相納候得共、居住地御入用之節二者何時ニ而モ速ニ返納仕、其年ノ地代金者月割ヲ以テ精算仕可相納候、且平素共地代金滞之節者、本人ニ不抱証人方より聊無相違可相納候、依而地借証如件

明治十六年一月四日

東葛飾郡豊四季村

小作人 梶川忠吉^印

正人 成嶋徳治郎^印

吉田善四郎殿

(千葉県文書館所蔵吉田家文書・ア20)

史料5および史料6はいずれも明治16年(1883)1月4日に作成されたものである。したがって梶川忠吉は、地主吉田善四郎から居住地3畝26歩を年1円16銭で借り、同時に小作地として畑を宅地付分と蔵地分を合わせて2反5畝28歩を耕作しており、その小作料が前述のように3円2銭2厘であったので、居住地の地代1円16銭と合わせて4円強の地代を支払っていたことが分かる。明治16年(1883)に居住地の地代と畑の小作料を契約しているのは、この梶川が近隣周辺の農村から移って来た農民であったことを想起させる。吉田善四郎は、このような近隣農民を小作人として入植させ、農業経営や金融を営んだのである。

ところで金融については、先の表4に示したが、土地売買に関わる金銭貸借を示すと思われるものとして、表4の7における吉場利右衛門からの借用証文や、表4の9の小野組貸付掛との貸付証文などがある。また表4の2の斉藤徳次郎が鈴木直次郎に提出した「約定証」では、「柴田隼太郎所有地五畝歩示談之上、私方引請、右金円貴殿ヨリ正ニ預り候処確實也、然ル上者券証改正ニ相成候節者、貴殿名前二本紙割合ヲ以書換可申候」¹⁹⁾と記述されている。この柴田隼太郎所有の5畝歩とは、入植者に渡された家作地のことを指すものと考えられる。この入植者の土地を吉田家の総理代人であった斉藤徳次郎が引き受け、地券を書き換えるにあたり、鈴木と斉藤との間に存在する何らかの金銭関係に基づき、その比率が記された「本紙」の割合で土地の所有権を決め、その割合で地券を書き換えるという主旨が記されているのである。このように小作地経営を行う上での、土地の所有権をめぐる金融関係が、吉田家では盛んに行われたことを想像さ

せるものである。

いっぽう、その他の金銭関係においては、表4の1の柴田隼太郎から吉田善四郎に出された借用証文では、金3円の借用は「急場差支之儀ニ付借用」のためとあり²⁰⁾、表4の6の仲田源次郎が吉田に対して提出した金円借受之証では、金13円を「無拠要用ニ付」借用したことが記されている²¹⁾。表4の8でも単に「要用ニ付」としか記されていない。また、同表の3・4・5はいずれも貸借理由の記述がない。そのような史料のうち吉田家に対して提出されている金銭貸借証文は、少額の金銭貸借が多く、吉田家が小作人の生活維持のために貸与したものである可能性も十分に推察させるものである。

むすび

下総台地における牧開墾事業は、東京の富商たちを出資者とした開墾会社によって明治2年(1869)に開始したが、開墾事業は暗礁に乗り上げ明治5年(1872)には開墾会社は解散する。その後、開墾地は開墾会社社員である富商たちの所有地となったために、開墾地の土地所有権をめぐる開墾人との法廷闘争が展開することになった。開墾人は地券の交付を求め、それが実現できないとなると地券の書き換えを求めたが、結果的に地券は会社のものとなった。裁判に勝利したことにより、富商らは土地所有者として小作地経営を展開したのであった。

本稿が取り上げた吉田家は、開墾会社社員として豊四季村の開墾を担当し、その後、同地の地主として小作地経営を営んだ。同家に残された古文書からは、小作地経営を中心に経営が展開したことが知られる。それらの土地の売買を介した金融関係や、小作人の生活維持のための金銭貸借などの金融活動も行っていた。

元来は東京窮民の授産を目指した政策であったが、事業は挫折し、結果的に開墾会社に地券が交付され土地所有権が確立することで、地主・小作

関係を構築することになった。そこで地主経営を展開した吉田家は、単に小作地からの収入を獲得しただけではなく、自らも現地に移住し、土地の取引を通して金融関係を展開している。そのようななかで現地の村民の暮らしの維持のための融資も行っている。もちろん安定的に小作料収入を得るために、小作人の生活の維持に努めたということであろうが、地域の農民の生活維持に努めることで、地域の発展の礎を成したと評価することもできる。東京窮民の授産は失敗に終わったが、このような富商の参加と定住によって、長期的には下総台地の地域発展に貢献したと言えるだろう。

ともすると、小作地をめぐる訴訟問題もあり、小作地からの収奪を行った地主経営の側面が強調される傾向がある。しかし取得地のなかには小作地とならず荒蕪地となり、後年におよび再び入植者を小作人として再開墾させる地域もあった。彼らが取得した土地が全て小作地となったわけではなく、その全ての取得地から小作料収入を得ることができたわけでもなかった。そのようななかで継続的に農業経営を行ったことで、地域発展の礎を築いた側面も併せて考察するべきである。

注

- 1) 白濱兵三「佐倉牧跡における集落の形成過程」『千葉大学教育学部研究紀要』第3号（1954年）、壇谷健蔵「明治維新に於ける窮民授産と地主の成立—下総小金牧・佐倉牧を中心として」『房総史学』第1巻第3号（1960年）、天下井恵「教材開発〈地域の歴史上の人物〉北島秀朝—天皇と窮民に尽くした人—」『歴史科学と教育』第16号（1997年）、同「初富開墾人友七の生涯」『鎌ヶ谷市史研究』第10号（1997年）、同「開墾局知事北島秀朝」『鎌ヶ谷市史研究』第13号（2000年）、同「小金牧開墾の初発構想と初富農舎」『鎌ヶ谷市史研究』第23号（2010年）、菊池順子・綾見美恵子・小林美喜子・松村富喜子「〔実践記録〕社会科学習「初富をひらいた人々—小学校4年生地域教材開発事例—」」『鎌ヶ谷市史研究』第10号（1997年）、神田文人「成田市内およびその周辺の開墾地と陸軍の『偵察録』」『環境情報研究』第7号（1999年）、高田洋子「房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から（1）」『環境情報研究』第8号（2000年）、同「房総の歴史と下総台地の

- 開拓：メコンデルタ開拓との比較から(2)』『環境情報研究』第11号(2003年)、同「房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から(3)』『環境情報研究』第12号(2004年)
- 2) 原直史「慶応二年開墾奨励令と房総農村」(吉田伸之・渡辺尚志編『近世房総地域史研究』東京大学出版会、1993年)。
- 3) 『柏市史 近代編』(2000年) 209頁。
- 4) 同上、244頁。
- 5) 同上、200頁。これらの入植条件は、「下総国牧地開墾場へ移住之者授産向大意規則」に示されたものである。
- 6) 同上、245～246頁。
- 7) 千葉県文書館『収蔵文書目録第十六集 諸家文書目録6』(2003年) 参照。
- 8) 壇谷健蔵「明治維新に於ける窮民授産と地主の成立—下総小金牧・佐倉牧を中心として」『房総史学』第1巻第3号(1960年) 12頁。
- 9) 『八街町史 通史編』(1974年) 116頁。
- 10) 千葉県文書館『収蔵文書目録第十六集 諸家文書目録6』(2003年) の解題を参照。同書では斉藤徳次郎は「総理後見」と記されている。
- 11) 「入置申証」(千葉県文書館所蔵吉田家文書・請求番号ア115)
- 12) 「礼状一札」(千葉県文書館所蔵吉田家文書・請求番号ア97)
- 13) 「家作借受証」(千葉県文書館所蔵吉田家文書・請求番号ア65)
- 14) 「約定書」(千葉県文書館所蔵吉田家文書・請求番号ア103)
- 15) 「確証」(千葉県文書館所蔵吉田家文書・請求番号ア39)
- 16) 『柏市史 近代編』(2000年) 254～255頁。
- 17) 『柏市史 近代編』(2000年) 247頁。
- 18) 「地所売却金計算」(千葉県文書館所蔵吉田家文書・請求番号ア74)
- 19) 「約定証」(千葉県文書館所蔵吉田家文書・請求番号ア77)
- 20) 「借入金之証」(千葉県文書館所蔵吉田家文書・請求番号ア38)
- 21) 「金円借受之証」(千葉県文書館所蔵吉田家文書・請求番号ア16)

参考文献

- 『千葉県史 明治編』(1962年)
- 『千葉県史料 近代編 明治初期二』(1969年)
- 『千葉県の歴史 通史編・近代1』(2002年)
- 『千葉県の歴史 資料編・近現代4(産業・経済1)』(1997年)
- 『鎌ヶ谷市史 下巻』(2017年)
- 『船橋市史 史料編九』(1997年)
- 『柏市史 近代編』(2000年)

- 『柏市史 資料編10 小金佐倉牧開墾・上』(1974年)
『柏市史 資料編11 小金佐倉牧開墾・下』(1974年)
『成田市史 近現代編』(1986年)
「小金・佐倉諸牧の開墾」(東京都総務局文書課『東京都史紀要』第九、1951年)
『松戸市史 下巻(1) 明治編』(1964年)
『富里村史 通史編』(1981年)
『八街町史 通史編』(1974年)